

資料紹介

こみきみこ著『その時19才のわたしは』執筆1965年・公開2010年、私版

本田一成

要旨

本稿は、近江絹糸人権争議（1954年6月～9月）の渦中にいた若年女性労働組合員・こみきみこ氏（1936年生まれ、富士宮工場勤務）が、19歳当時の状況を描いた手記の内容を公開し、解説する。こみ氏は争議後11年が経過して31歳、結婚し二児の母親となった1965年に執筆している（公開されたのは2010年）。

近江絹糸人権争議は106日にわたる長期の争議であり、マスコミが連日大々的に報道し国民の大きな関心を集めた日本最大級の争議である。したがって、争議に関する既存の資料は、書籍、論文、記事、手記、組合資料、裁判記録など多岐にわたり、大量に存在する。これらの既存資料と照合したとき、本資料は次のような独自の意義を備えている。

第1に、人権争議は同時多発的な争議であるが、争議の詳細となると、大阪の労組本部の一部を除けば、ほぼ彦根支部に集中する傾向が顕著である。本資料は、これまで不明点の多かった富士宮支部の情報を満載している。

第2に、人権争議に対する労働者の心情を知りうる資料は、当事者たちの回想記録や意見記録を中心に存在しているが、回想記録も彦根集中傾向を免れていない。また、意見記録も編集する第三者の意図をもって整理されているため、情報の解釈は容易ではなく不明点も多い。本資料は筆者の統一性、系統性を持った視点による深い洞察がみられる。

第3に、本資料は、全織同盟（現UAゼンセン）が結成し、支援指導した第二組合の近江絹糸労組富士宮支部を外側から描いている。筆者が争議の途中から第二組合へ加入したため、非組合員がいかなる経過をたどって組合員となっていくのかが詳細に理解できる。

本資料からは、富士宮工場特有の争議状況とその原因もうかがい知ることができる。例えば、近江絹糸本社のある大阪や本拠地工場のある彦根から遠距離に所在することの影響が理解できる点、全支部の中で最も組織拡大の遅れが生じていたが途中で反転した点、富士宮工場で発生した最大の山場となった1954年7月13日の警察介入による大規模乱闘事件を描いている点などである。

近江絹糸争議には他工場の記録を含めまだ多くの重要資料が埋もれているが、本資料はその1つとみられ、以上の点を中心に近江絹糸人権争議の労働者状態と争議の実態に関する数多くの新たな知見を得ることができる。

本文

この資料は、近江絹糸人権争議（1954年6月～9月）の渦中にいた1人の若年女性労働組合員・こみきみこ氏が、1965年に記した手記である。争議後11年が経過して31歳となり、結婚し二児の母親となった時に執筆された。会社、労働組合、管理職、組合員、上部産別組合、新聞記者など、人権争議に関わる者が

どう行動していたかを記録するとともに、当時の労働者の感情を露出させた。

近江絹糸人権争議は 106 日にわたる長期の争議であり、マスコミが連日大々的に報道し国民の大きな関心を集めた日本最大級の争議である。当時、ナショナルセンター全労会議（後に同盟）の主力産別組合であった全織同盟（現 UA ゼンセン）が支援指導した。争議に関する既存の資料は、書籍、論文、記事、手記、組合資料、裁判記録など多岐にわたり、大量に存在する。それらの既存資料と照合したとき、本資料は次のような独自の意義を備えている。

第 1 に、人権争議は、大阪本社を皮切りに、瞬時に彦根、津、大垣、富士宮など各工場と営業所に波及して以降、労組各支部が行う同時多発的な争議である。だが、争議の詳細となると、大阪の労組本部の一部を除けば、ほぼ彦根支部に集中する傾向が顕著である。⁽¹⁾ 本資料は、これまで不明点の多かった富士宮支部の情報を満載している。さらに、筆者のこみ氏は現場労働者ではなく、給与計算を担当する事務員であったため、工場内の情勢を広く見渡せる立場にいた。この点が本資料の情報の広がりや深さに反映されている。

第 2 に、本資料は 10 代の若き女性労働者の感情を吐露したものである。もちろん、労働者の心情を知りうる資料は、当事者たちの回想記録や意見記録を中心に存在している。だが、回想記録も彦根集中傾向を免れていない。また、意見記録とは第三者の意図をもって募集された「声」の整理であり、その意義は決して小さくはないが、他者によって編成された情報の解釈は容易ではなく不明点も多い。⁽²⁾ 本資料はこみ氏の視線が固定され、争議を取り巻く各方面に対する統一性、系統性を持った深い洞察がみられる。

第 3 に、本資料は、全織同盟が結成し、支援指導した、第二組合の近江絹糸労組富士宮支部を外側から描いている。その理由は、こみ氏が争議の途中から第二組合へ加入したことによる。つまり、加入前の視線は会社側のみならず、非組合員として、冷静に富士宮支部、その組合員、全織同盟へ向けられている。同時に、非組合員がいかなる経過をたどって組合員となっていくのかが詳細に理解できる点で貴重である。

これらの意義を備えているため、読後には、既存研究にはない数多くの新たな発見を見出すことができる。さらに本資料からは、富士宮工場特有の争議状況とその原因をうかがい知ることができる。ここでは主要な 3 点につき記しておきたい。

第 1 に、富士宮工場は、近江絹糸本社のある大阪や本拠地工場のある彦根から遠距離に位置するため、会社側の監視や攻撃がやや弱い局面がみられる。本資料は、ワンマン経営であったがゆえに、優先度の違いによる盲点が出ていた可能性を示唆する。そうはいつでも程度の違いであり、現場や日常生活で衝突する労使の実態を類推すれば、富士宮工場の労働者への締め付けは過酷である。それゆえ他工場の苦境も容易に推測することができる。

第 2 に、富士宮支部は、全支部の中で最も組織拡大の遅れが出ていた。本資料では、こみ氏がそうであったように、御用組合から突然に出現した第二組合へ移籍する過程が記されている。また、争議前半に組織拡大が停滞した最大の原因に

ついても触れられている。すなわち、本資料は、人権争議が複数組合による組織化合戦であった側面を明瞭に描いている。

第3に、富士宮工場は、1954年7月13日、警察の介入により人権争議最大規模の乱闘が発生した現場である。工場正門前のピケ隊を警察が排除したこの事件で、全織同盟から指導に入っていた宇佐美忠信と支部役員たちが逮捕され、容赦ない暴力排除と検挙を目撃した地元住民は警察署を取り囲み投石で破壊した。この衝突が契機となり第二組合が急拡大した点で、富士宮支部にとっては争議の最大の山場といえる。本資料はその実況を報告するとともに、記事ネタ探しに奔走する新聞記者の悪習にまで目を配っている。

最後に筆者の略歴と、資料を発見できた経緯について記す。こみきみこ氏は、1934年生まれで、1953年静岡県立富士宮東高校を卒業後、近江絹糸に入社し富士宮工場事務部労務課給与係となる。当初は全織同盟が支援した第二組合に入らず会社側で勤務を続けていたが、先述の正面衝突事件をきっかけに第二組合に加入した。人権争議後は富士宮支部専従書記となり、その後、大阪の近江絹糸労組本部専従書記に転じた。1961年、再び富士宮支部の専従書記となった。1963年に近江絹糸を退職し、以後複数の民間企業に勤務した。

本資料は、2018年に実施した近江絹糸争議に関する一連のインタビューの過程で入手した。近江絹糸労組第二代富士宮支部長である野付利之氏に面会した際に本資料1冊の提供を受けた。その後、本資料の内容確認を含めてこみ氏へインタビュー調査を実施した際に、こみ氏本人から同1冊を寄贈された。このため、1冊をエルライブラリー（大阪産業労働資料館）へ寄贈した。

平成末期において、昭和20年代の争議を取り上げることになるが、改めて労働者状態と争議の実態が詳細に把握できる。近江絹糸争議には他工場の記録を含めまだ多くの重要資料が埋もれている。それらが消失する危険性がある半面、この争議研究の余地は決して小さくなく、近江絹糸争議研究は依然として完結していないことを実感している。

(1) 典型的な文献として、谷合(1987)、朝倉(2012)(2014)などがあげられる。なお、もっとも幅広く記述しているのは上野(2009)であるが、論点の広がり大きい分だけ争議自体については経過報告に近い。

(2) 例えば、近江絹糸労働組合編(1954)、近江のうた編集委員会(2007)、白石道夫編(2015)などがある。

参考文献

朝倉克己(2012)『近江絹糸「人権争議」はなぜ起きたか 五年間の彦根工場潜航活動を経て』サンライズ出版。

朝倉克己(2014)『近江絹糸「人権争議」の真実 新組合彦根支部長が語る106日間の闘争の全貌』サンライズ出版。

上野輝将（2009）『近江絹糸人権争議の研究－戦後民主主義と社会運動－』部落問題研究所。

近江絹糸労働組合編（1956）『らくがき』三一書房。

近江のうた編集委員会（2007）『近江のうた－近江で働いて、闘って、恋をして－』。

白石道夫編（2015）『体験者がつづる近江絹糸人権争議』文理閣。

谷合佳代子（1987）「大阪から始まった近江絹糸争議」、西村豁通、木村敏男監修『大阪社会労働運動史 戦後編 第3巻』大阪社会運動協会。